

# SOUND

*Art & Technologies*

APRIL 2020  
No.101

## 特集

**北の大地で奏でられる音楽と楽器 PartII**

**第7回ライブ・エンターテイメント EXPO イベント報告**

**最近のサブウーファー考**

**中部支部「ドルビーアトモス」施設見学会報告**

Since 1977

Sound Engineers and Artists Society of Japan

一般社団法人日本音響家協会

## ～北海道から新しい和楽器の可能性を発信～

### 《 新田 昌弘 》



#### 1. 演奏する楽器の構造、歴史や演奏方法の紹介

##### ・歴史

津軽三味線は 150 年ほどの歴史と言われていています。細棹の三味線は約 400 年前、沖縄の三線は 500 年前以上という事で、三味線の中では一番新しい伝統楽器になります。

##### ・ジャンル

とても高価で格式が高いイメージがある「三味線」ですが、多種多様で現在ではミニギターやウクレレのような小さく手軽で安価な三味線なども生まれてきていて、お土産を買うように購入し触れられる楽器にもなってきました。

三味線は世界の民族楽器でもめずらしく独自に発展分離した楽器です。古典などでも、長唄、端唄、小唄、地唄、義太夫、清元、歌舞伎、大きく分けて沖縄や奄美、津軽三味線など時代と共に多種多様なジャンルに分かれてきました。

##### ・演奏方法

歴史を紐解くとそれぞれの楽器の特徴や魅力に迫れると思いますが、今回は僕の使用している楽器の紹介をしたい

と思います。

僕の使用している楽器は青森県で生まれた津軽三味線という楽器です。弦楽器でありながらもパーカシオンのような要素を持ち合わせた世界でも珍しい演奏方法をもつ楽器です。

その理由は右手でバチ（しゃもじ型）を使用しベースのスラップのように弦を叩いたアタック音でリズムやリフのフレーズを繰り返していく独特な奏法にあると思います。弦を叩くだけではなく上に返すダウンアップや、指でミュートして音を消したり、左右に動かしたりと幅広く音量を変えながら演奏していきます。

左手でも指で弦を押さえるだけではなく弦を打ったり、弾いたりして音を出すなど、両手を巧みに使いとても幅広い奏法を持ち味としている打弦楽器であります。

##### ・楽器の構造や特徴

楽器自体は紅木や花梨、紫檀などで出来ています。皮は昔、犬の皮を貼ってありましたが、近年様々な問題と情勢により合成皮になってきました。アメリカのバンジョーのようなイメージでしょうか。

昔は羊やヤギの皮でしたが今では合成の皮ですね。音は打撃音と共に胴鳴りが非常に大きく、和太鼓の様に瞬間的な迫力がある楽器です。

音のサスティーンはほとんど伸びない楽器ですが、ここに日本の心、日本の音の「間」と呼ばれる心地よさが含まれているのではないかと感じます。伸びないからこそ「間」という独特な空間音が作られ、室内の響きがすべて消えるまで音が伸びているという想像力が働きます。それは表現力であり、「哀愁、情緒」を豊かに表現する日本ならではの技でもあると思います。また、進化の過程として楽器の裏についている「さわり」という部分が特徴的です。木で作られた突起に絃が微妙に触れると振動音が鳴り倍音が聴こえてきます。これは、楽器本体で音を響かせるリバーブ的な要素で生まれたのではないかと考えています。

歴史が沖縄の三線は「さわり」が無いので丸くて柔らかい暖かな音色が特徴です。それに比べて北の三味線は乾いた音で高音の効いた鋭い音色や人の泣き声に聴こえてくる様な艶っぽく甘い音色が特徴です。

面白いのは気候が違うのでピッチの合わせる周波数が「北は高め」、「南は低め」に合わせてところです。

20代の頃に沖縄唄者のよなは徹さんとセッションした時に、同じ「ド」で調子を合わせても、全くうまく合わなかったのが記憶に残っています。結局、周波数に気づいたのはCDが出版されてからでした。(笑)

### ・近代の和楽器音源の広さ

和楽器は近年エレキ仕様になりラインを通して様々な音色に変えられるなどデジタル機器を通して幅広い表現ができる楽器にもなってきました。

例えば、僕はEQで400～300ヘルツ付近をブーストします。これは三味線の胴鳴りがこの周波数ですので、そこまで上げることによってスピーカーから聴こえる音がようやく自分がいつも生音で聴いている胴鳴りのイメージに合うからです。自分自身も演奏現場でモニターを聴いた時に「手首に負担がなく音が膨らむ」ところでありますので三味線奏者としては知っておきたいポイントだと思っています。

20代の頃はエレキギターとエフェクトボードを持ってライブに行き、様々な音に変えて演奏しました。エフェクトをかけるだけではなく生の音と混ぜるなど色々試してみました。

しかし、飛び道具的な要素で面白く若い世代にも和楽器を伝える表現方法だったとは思いますが、結局三味線を聴きに来た人にとってはあまりにも音が変わると「誰が弾いている音?」、「音を変える事はなんの意味があるのだろうか?」という感じになっていた事もあり「新鮮で聴いた事がなく、記憶に残る音」というのはまだまだ和楽器本来の音が大切だと痛感しました。

その結果、電車に乗るのに重たい、ということもあり、エフェクトボードを使うのはやめることにしました。(笑)

最近ではNHK公式オリンピックソング「パブリカ」が流行っています。曲を聴きながらどんなサウンドなのか分解していくと、三味線の様な音が「ゴーストノートの位置」に入っているのを感じました。耳を立てて集中して聴かないとわからないのですが、三味線サウンドをこうして使うのはとても面白いなと思いました。

三味線は本来であれば楽器単体の演奏にゴーストノートの技が入っているのですが、サウンドとして隠し味の様に使用されているのは興味深いところでもあります。

近年では生音のサンプリングをソフト音源にしているので、音質も良くなってきたのと同時に、簡単にソフトで使

用できる様になり、曲を作っても自分が指揮者になった気分になるほどです。さらには生の音をわざと合成的な音に調整するなど「加工センス」も重要な時代にもなってきました。

生の和楽器となると前に出過ぎたり存在感が強くなり過ぎたりするので、打ち込み的に作る和楽器の音色を曲中の要素で使うのは作曲家の個性ある技ではないでしょうか。自分自身DTMで作曲するのですが、三味線奏者としてはこういう使い方は想像もしていなかったので大変勉強になるところであります。



## 2. 自身の来歴、北海道を拠点とするこだわり

～音楽で戦う生き方～

僕は中学生から器械体操をしていました。中体連では団体戦で北海道1位になりましたが個人では全国大会で最下位の成績でした。悔しい思いをしましたが、しかしそれが僕の人生を変えるキッカケになっていきました。

丁度同じ頃、父(新田弘志)は津軽三味線の全国大会で総合優勝しました。今思えばですが、それはきっと「自分の背中姿を見せたかったんだろう」と感じています。実際中学生で最下位だった僕の心の支えが父の背中姿になっていったのは紛れもなく事実です。

その後、照れ臭くはじめた三味線ではありましたが、機が良かったのか1日10時間以上練習するほど虜になり夢中で練習しました。「いつかは上手くなって父のようにカッコイイ演奏がしたい」という想いの強さが今の僕が持つ事ができた演奏技術の大きい部分と言っても過言ではありません。

そして、学生時代は父から沢山のステージに出させてもらい19歳で上京して洋楽器の音楽家の先輩たちとコラボレーションをメインに活動しました。その時から自由と可能性がこの楽器にはあるという想いを抱きました。

25歳までの7年東京に住み、気づいたことがあります。  
「音楽はずーっと戦い」

東京にいる時は毎日のようにライブ演奏があるのですが、演奏しても演奏しても自分自身で進化している気が全くしませんでした。その中で、お客さんや先輩たちから「もっとこういう風に」、「それじゃあダメだよ」という心に残るアドバイスをいただき、音楽は技もセンスも一生戦っていくのだと強く感じました。そして着地点を見いだすのは 自分自身だなどと考え始めました。

#### ・新しい自分探しと仲間との出会い。



その後、自分の着地点を見つける旅が始まりオリジナル曲や、独自の演奏方法を様々なアーティストから盗み、自分の三味線の技に応用していきました。それらの技は一度得たものなので今でも使用して個性にはなっているとは思いましたが、自分は意外にも北海道に戻り音楽家をやり直すことを考え始めました。

北海道に戻り自分の同世代の仲間（和太鼓奏者 した）と演奏活動をするようになりソロ活動からユニット活動に転換していきました。今まではソロで自分だけの音楽を考えてきたのですが、初めて同じ志の仲間と一緒に北海道から発信して、音楽の素晴らしさという着地をどうしたら良いかを一緒に考えて生きていく時間を過ごし始めたのです。

その後洋楽器と和楽器の特徴や大きな違い、それぞれの魅力を考えてソロからユニットやグループ編成をやるこ

とにより伝統音楽を伝える新しい方法を見つけることができました。

#### ・拠点となる意味

現在は仲間と共に3年前に芸能プロダクションを立ち上げ経営していますが、その前は個人事業でした。演奏家だけではなく経営者として北海道の芸能を考える機会が増えていったのはこの頃です。

北海道を拠点にする理由は 田舎も都会も両方ある北海道で 和楽器の音に興味を持つ人たちに 直接出向き、目の前で演奏して、故郷の匂いを感じる様な音楽を届けたいなと思うのと、僕らの活動が未来の若い世代が次の伝統音楽を作っていく「自信と誇り」になってもらえどという強い思いからです。

今は音楽でも情報や音源、映像までもが目まぐるしく入ってくる時代です。だからこそ日本の伝統楽器は先人たちが生きてきた生々しい音色を伝える良いチャンスだと確信しています。

#### ・演奏だけではない感動

この楽器に可能性をさらに感じたのにはあるきっかけがありました。8年前にカイルアボット氏と国際三味線協会を立ち上げ、最初は50人程度の会員は現在は3,000人以上になりました。

最初は世界中の三味線愛好の人から質問を受け、歴史や、三味線の演奏方法、ライブでの楽しい話をする「三味線コミュニティサイト」という活動でした。

その後、興味を持った人から楽器を購入したいけど相談のって欲しいと言われ、楽器を見つけ、郵送するなどのお手伝いをしていました。

楽器を届け始め1年ほどして、ある方からいただいたメッセージに胸が焦げるぐらい心が熱くなった覚えがあります。

「楽器が無事に届きました。実は娘のクリスマスプレゼントでした。娘は涙を流して喜びました。家族で本当に感謝します。心からありがとう。」

僕は演奏家として世界中に行き目の前で演奏してきましたが、三味線を届けることによって楽器を通じて「感動を届けることに繋がるのだ」と僕自身が感動しました。

自分も演奏家としてこれからどう生きていったら良いの



だろうと模索していた中でもあったので、世界にはまだまだ日本の音楽を必要としてくれる人々がたく



さんいるのだから、もっと楽器を通して感動を届けたいなという志が強くなったのはこれがきっかけでした。

### 3. 楽器、歌に対する思いやこだわり

三味線は父から指導を受け歌の旋律は母から指導を受けました。

父は職人気質な三味線奏者なので三味線職人の想いをとても大事にしていました。演奏家が職人の想いを継いで人々にその心意気を届けるものと父の演奏姿を見てから感じました。

母からは民謡の節や歌詞その一つ一つが意味を持っている事を教えてもらいました。楽器も歌も、体で発信する道具であり、大切なのは人に伝える感情だと想います。音楽には言葉のように人の心を動かしていく力があると父と母の姿を見て感じました。

そして今、父から「教えられた技」や「盗んだ技」、「自分で見つけた技」を惜しみなく出して演奏していく事が自分の個性だと信じています。

楽器も普通は六分（分は胴の大きさ）が一般的ですが、父は日本でも珍しい七分の三味線を使用しています。これは父が誰よりも大きい音で迫力のある音を出したいという想いから作ったものですが、僕も一生使い続けたいと思います。実際に七分の三味線を弾いてみると、一度使ったら六分に戻れなくなるぐらい音が違うのと、最初楽器を持った時は必ず筋肉痛になるぐらい重さも違うのです。(笑)

### 4. ライブ等での音響との関わりや音響技術者への要望

近年音響機材がとても良くなり 個人でも音響機材が扱いやすくなりましたそれによってアーティスト自身が音の良さを考えるようになったと感じています

#### ・今の音響効果の絶対的なサウンドについて

レコードからデジタル音源に移行してさらに アナログ音源の素晴らしさを 個々で感じるような時代になってきました。レコードはマニアックと言われている時代ですが

生音と同様にレコードは、空気を通して聴く音がもっとも人に心地よい音ではないかと思っています。

その中で時々忘れそうにもなるのですが「音自体を楽しむ豊かさ」をこれから僕は基準にしていきたいと思います。

人は常に自然の音や現代では騒音など様々な音に囲まれて生きているので、心地よさは現代に必要な「豊かな心」を求める基準となります。その「心地よい音」はこれから音響世界においてとても重要になってくると僕は思います。

良い音はどこから？と幾度もなく考えますが良い音自体基準を決める物は存在しないと思います。そして人が心地よい音を知る機会は母のお腹の中から最後に死を感じていく瞬間までの約 100 年内の中で幾度となくあり、それを一生見つけていこうとすることが音響効果の楽しみ方ではないでしょうか。

その中で豊かな気持ちになれる音とは一体どんな音なのか？人それぞれありますがやはり心地よさが重要になってくると思います。

デジタル機器や楽器によって変更するイコライザーやそれらのエフェクトが生まれたのも、心地よさが人それぞれ違う観点から多種多様なものであったからこそだと思います。

その歴史も大切ですが、振り出しに戻って今の世代に合う心地よい音質を作り出していく人たちのこだわりがこれから必要になってくると思います。

どれだけエフェクトを使っても演奏家本人が聴こえる位置と他人が聴こえている位置では全く音が違うので、感覚的に妥協してしまうのも現実です。しかし、それに近づけようとする試みが音響効果の魅力ではないでしょうか。

一人一人に対して向き合う心地よいサウンドが音響効果の魅力であり可能性に繋がっていると信じています。

「最近のデジタル音楽は音像が綺麗すぎて聴いていて疲れてしまう」など最近耳にしますが、人の耳もまた昔とくらべて進化して、対応以上になってきてしまったのかもしれない。

### 5. これからの課題

～テーマ 想像力と個性を高める～

自分自身もマイキングやミックス、マスタリングをやります。その中で「結局機器によって全て違うから」というのもよく聞く話題の一つですが、どんなに機材が変わっていても大切な想いは「こうすればきっと生らしい音に近

づける」、「あえて変えることでゴーストノートの様な効果を作り感覚的に届けたい」ということだと思います。そういった想像力を鍛えていくことが今後音響効果の大切なところではないでしょうか。

最近「どんな曲聴いても同じ曲に聴こえるな」という話題も耳にします。それらは「時代による流行の音楽だから」ではなく、世に出る音と同じサウンドになっているからだと思います。

想像力から始まって曲が作られていく中で最後に似たようなサウンドにするのは個性があるサウンドとは言えないと思います。

「アーティストの想像力から作品へ、作品からさらに個性を持ち上げる」

そんな音響効果で様々なサウンドが聴ける時代を僕は強く願っていると同時に、もしそんな時代が来たら、CDを手に取り聴きくらべる人も増えるのではないかなと期待を膨らませています。アーティストとしては想像から曲を作り仲間と音作りをしてそれが世に出て人々に聴いてもらい、みんながどんな感動をしているのかを想像してさらに新しい作品を作り出すという事が生きがいと信じてます。

これからも僕自身個性がある音楽を自ら作っていくために努力していきたいと思っています。

【 につた まさひろ 】



有限会社 Ezo'n music  
代表取締役 社長 新田昌宏  
〒007-0806 北海道札幌市東区東苗穂6条1丁目15-20  
Tel: 011-788-7200 Fax: 011-788-7200  
Email: office@ezon-music.com Web: ezon-music.com

●新田昌弘プロフィール

北海道札幌市出身 S.59.2.29 (閏年生れ)

父、新田流 家元「新田弘志」に影響を受け14歳から津軽三味線を始め、7ヶ月後に1998年津軽三味線 東京大会中高生の部で優勝。その後2000年、2001年、2002年の東京と青森県で行われた津軽三味線全国大会で連覇。

海外公演ではアメリカ、カナダ、ベルギー、アイルランド、ロシア、スペイン、アイルランド、メキシコ、韓国、ベトナム、タイ、フィリピン、ラオス、台湾、コスタリカ、トリニダードトバゴ、ドミニカ共和国、トルコ、サウジアラビアなど世界各国で演奏。又、サウジアラビアでは国王主催の「ジャナドリア祭」に招待され国際交流基金を通じて国際文化芸術交流に貢献し、二度に渡ってサウジアラビアで演奏。

父とのユニット「新田親子」としてペンシルバニア大学からの要請で1ヶ月間にも及ぶツアーと大学で伝統文化のレクチャーを務める。

津軽三味線 DUO ユニット [OYAMA × NITTA] としては2011年小沢征爾氏が芸術監督をする「JapanNYC」 in カーネギーホールで津軽三味線だけのフルコンサートを実現。翌日米国で有名な「The New York Times」の一面に掲載される。

2005年には沖縄唄者のよなは徹と「題名の無い音楽会」に出演する。

2013年にはラテンアメリカ最大規模の音楽祭であるセルバンティーノ国際芸術祭(メキシコ)に招聘される。独自に研究した匠なテクニックと様々な楽器とのコラボを経て、津軽三味線の魅力を多に発揮する「コラボ三味線奏者」として活動する中、舞台音楽の作曲や編曲、映画出演(オーバードライブ)など幅広く活動する。『国際三味線協会「Bachido(撥道)」 現在会員数3000人以上』の日本代表を務める。海外に届けた三味線は60カ国200本以上にもなり、各国で三味線ワークショップを開催するなど、三味線奏者育成も行っている。自身がプロデュースした「札幌国際三味線フェスティバル」「札幌和楽器フェスティバル」を開催するなど主催コンサートでも大きな成功をおさめた。よさこいソーランチームには30チーム以上録音する。2015年「嵐/ARASHI LIVE TOUR 2015 Japonism」札幌ドーム公演に三味線隊の一員として参加。教育的活動では公益財団法人日本青少年文化センターからの要請で15年以上に渡り全国各地の小中学校にて公演を行っている。

北海道の活動としては和POP音楽団「Ezo'n」をプロデュースし古典的な楽曲をアレンジし若い世代に向けた音楽発信をする。父から受け継いだ伝統継承とともに、津軽三味線や民謡の魅力伝えるため、革新的な新しいサウンドを生み出し続けている。